

前回、予てより好意を寄せていた叶さんと結ばれた俺だったが、さっそくもクソも、その翌日にはもう浮気をしていた。

相手は昨日、最後までやりそびれた日暮 燈子。

俺の職場の先輩に当たる人物だ。

どうやら俺は、釣った魚に餌をやらないタイプだったらしい。

別に叶さんを想う気持ちが無くなっているわけではない。

叶さんは本当にカワイイ。

しかしなんと、俺の様な村外の(元)ノンケはかなり人気があるらしく、燈子さん以外にも、会う人会う人の視線が俺に語りかけてくる。
『抱いて♡』と…。



昨日最後までデキなかったもんね♡今度は最後までしょーね♡」

「やっぱりすごい大きい…♡ね、挿れていいよね？♡」

「う…は、はい…っ！」

はあ

はあ

つい先日まで童貞だった俺には、到底断る事の出来ないお誘いだ。断るなんて、もったいない……！！

「あ、ううっ…、おっきい♡全部、入るかな…」
「燈子さん…っ!」

燈子さんのナカは、叶さんのはまた違った感触がした。
叶さんよりもゴリゴリした感じがする。
体制の所為もあるのか、叶さんとの時には難儀した挿入も、
かなりスムーズにいった。

俺は、ずぶずぶ飲み込まれていく自分のイチモツから、
目が離せなかった。



「ひっ……っす……っ♡お尻っっていうか……お腹の中、
かき回されてるみたい……♡多田くん♡気持ちイイよぉ♡」

燈子さんは激しく腰を打ち付けてきた。
濡れた音があまりに大きくて、用務員室の外まで聞こえやしないかと、
冷や冷やしたが、俺のチンポに夢中になっている燈子さんを見て、
心底興奮した。

「燈子さんっ……っでも出ますっ！」
「わたしも……っ♡イク♡イクイクっ♡」



「ひあ……っ！」
「ううっ……！」



「はあ、はあ、やだ…♡思ったよりいっぱい出ちゃった…♡」
「…お、俺もです…」

俺はまためちやくちやに射精した。



はあっ

はあっ

ドッ

ズルッ

終業後、二人の生徒に声をかけられた。

「あつ、新しい用務員さんだー!」
「?」

「ねえ、用務員さんてノンケって本当ですか?」

「…え、まあ…(一昨日までは)」

「ええ〜!本当なんだ!」

「だ、だったらなに?」

きゃっ ♀

「あのね、僕たちノンケの人大好きなんですよ。」

「は…?」

「だからあ、僕たちと、ちよっと遊びませんか…?」

ぎゅっ ♀
♡

俺は、この二人と『ちよっと遊ぶ』事にした…。



「さくら…用務員さんのおちんちん…、すごいおっきい…」
「ほんとだね、いっぱい遊んでもらおう？カエデ♡」
二人の家に招かれたのだが、丸でラブホ(行った事ないが)ようだった。

「用務員さん、もう村の誰かとエッチしました？」

「え…、あ、まあ…」

「じゃあもう、おちんちん見ても平気だね。」

というか、金髪の子の方、タイツに穴が空いている…それ以前に、
とてんでもないハレンチな下着…なのか？あれは？紐…に見えるのだが…。
とりあえず、制服の下が気になって仕方がなかった。



スカートを脱ぐと、一気に変態じみてきて、たまらなかった。
「な、なんていう下着つけてんだお前ら…!」

はぁっ

はぁっ

に

に

に

に

に

ぴっ

ぴっ

はぁっ

はぁっ

「ふふ♡気になります?見たいですか?」

「用務員さん早く一回射精しちやっってくださいよ…」

目の前に突き出されたさくらの股間から、なんとも言えない臭いがした。
汗と、性器特融の臭いだ。

興奮した。

「ほらどう？気になってた制服のシタ♡」
「ぐ…っ、それ全然どこも隠せてな…あっ♡」
「あはは♡僕達のエッチな下着姿をおかずに射精しちゃいました？」

はっ♡

はあっ♡

はあっ♡

はっ♡

はあっ♡

はあっ♡

ぽん ぽん

その通りだった。

「すごい…おっきいし量も…こんなに…♡」



「うわ…す…」
「(う…っ!)」

は♡

は♡
は♡

は♡
は♡

は♡

カエデのナカは、叶さんや燈子さんよりもだいぶキツかった。
硬い肉壁でぎゅうぎゅう締め付けられた。

「いいなあ、僕もカエデに入りたい…♡
あ、因みに、僕は完璧タチだから、おちんちん入れようとしないでね♡」

ぎゅんっ きゅんっ

ズズズ…

♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡ ~ ~

ぎゅんっ

ぎゅんっ

「うああ…、用務員さんのおちんちんデカすぎ…っ、全部擦れちゃう…!!」

「きみこそ、そんなに締め付けたら…っ、うう!」



「はあ、はあ、こんなに奥まで、きたの初めてえ……♡」
「カエデ気持ちよさそう……♡僕も気持ちよくなってきた……♡」

はあ

い
あ

いあ

「あつ、ああつ、イクっ♡」
「用務員さん僕もイク♡見てて♡」
「ううっ、俺も…!」

はあっ

はあっ

きゅんっ

きゅんっ

きゅんっ

ドクッ
ドクッ

きゅんっ

きゅんっ

きゅんっ

きゅんっ

「うわ、用務員さん、まだギンギンだね…」
「まだ遊んでくれるよね…?」

はーっ

はーっ

今日の夜も叶さんと会う約束があるので、正直もう帰りたいが、
こんなにギンギンにされてしまっただけで仕方がないので、
もう少し遊んでから帰る事にした…。
叶さん…ごめん。

ドロ…

むわ…♡

ヒッヒッ

ムズ

ムズ

きゃん

きゃん

—

「用務員さん、今度は僕の舐めて？」

俺はもう、チンポを舐める事に抵抗は一切なかった。
というか最早、かなり興奮する。
さつきたちだから入れるなどと言われたが、
しつかりさくくもアナルを指で刺激している…。

そしてこの状況、ワガママだけど可愛い子二人に、
完全に棒扱いされてるのも、
なにか新しい性癖が開花しそうだ…。



「用務員さん…、ちよつとは動いて…
僕さくらちゃんとちゅーしたいから…」
「は…はひ…」

俺は下から上に向かって腰を動かし続けた。
自分の快楽とは関係なく、
ただ二人を気持ちよくする為の機械になったみたいだ…。



「はあ、はあ…、用務員さん、僕もうイっちゃう♡」
「カエデ一緒にイこ♡」
「俺も…イク…!」



俺はまたカエデのナカに大量に射精した。
もう今日は出来ない…。どうしよう。ごめん。叶さん…。

「ちぐら♡すき♡」

「僕も…カエデ♡」

こうして俺は、二人のオナニーの道具として使われ、精巢をすっからかにさせられた。



「ふふ♡さすがにおちんちんしぼんじやってますね♡
用務員さん♡」
「また…遊んでくれますよね…?」
「う…、うん…」

俺、こんなんでいいのか？
叶さんという可愛い彼女が居ながら…、
他の男の娘たちとセックスしまくって…。
というかこれ、バレたらコトだぞ、今度こんな事があつたら、
ちゃんと断ろう…。

スーパー賢者モードの俺は、全裸で猛省した。



しかし、その後何度も二人からのお誘いに応えて、
3Pをしまくった話は…また今度…。



「…多田くん…？…どうしたの…？…今日、ちよつと疲れてる？」

その夜、もちろん叶さんともシた。

そりゃそうだ、付き合って二日目だ。するだろう…。

今日も可愛い下着をつけている…カワイイな叶さん…、でも…。

ゆさっ、ゆさっ

ゆさっ

ゆさっ

「多田くん、無理しなくてもいいよ…？
新しい環境で疲れてるんだよ…、今日はもう大丈夫だよ…？」

中タイけない俺を気遣ってくれる叶さん…、俺は、最低だ…。
嫌だ、絶対中出しする…！叶さんのナカに、俺の精液…！！

ヒワ
ヒワ
}<
<}<
<}<
<}<

フワッ
フワッ

フワッ
フワッ

フワッ
フワッ

フワッ
フワッ

「あっ…」
「ううっ…!」



「はあ、はあ、叶さん…き、気持ち良かったです…、
ありがとうございました…」

「う、うん…僕も…良かったよ…」

（あ、あれ…昨日はあんなにすごい量だったのに…）」

無理矢理イった感が強かった…俺も、叶さんも…
俺、ちゃんと叶さんを大事にしていけるのかな…、
すごく不安を感じたのだが、



さっきまで俺のモノが入っていた、
叶さんのぽっかり空いたアナルを見ていたら、
なんだかとてもない罪悪感に苛まれた。

俺なんかの為に、こんなにアナルぽっかりさせて…。
絶対幸せにしなきゃ…。

ポッカリ…♡





























































































































































































































































































